

---

# みこみこ ～ 岩城神社日誌 ～

葵夢幻

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

みこみこ ～岩城神社日誌～

### 【Nコード】

N7117C

### 【作者名】

葵夢幻

### 【あらすじ】

岩城神社の巫女達の生活をつづっていく、愉快でほのぼのとする日誌。

## 腰は大事に

「聡史みーっけ」

それと同時に別方向から飛び出し目標に向かっていく子供。

ふっ、甘い。あんたのことはすで見つけており、ワザと見逃していたのだ。そう私が確実に缶を踏めるように。

確かに缶を目指している子供より、優衣が居る位置のほうが近い。そして優衣も缶を目指して走り出すのだが、突然、カッーんと缶は明後日の方向へと飛び去ってしまった。

そして缶を蹴った本人は鬼のような形相で優衣に近づき、襟袖を持つと顔を近づける。

「優衣、あんた今、何やってた？」

「美羽く、顔が怖いよ」

「そんなことより、何やってたの？」

「えっと、缶蹴り」

「何で？」

「缶蹴りは身を潜めながら鬼の動向を探りつつ、その隙を見て缶を蹴る。忍者には欠かせない修行方法なんだよ」

相変わらずワケの分からない説明だが、美羽の顔には笑顔が戻った。一応…。

「へえく、そうなんだ。っで、あんたは何時から忍者になったんだ」

「美羽、穏やかな笑顔からもの凄い殺気を感じるんだけど」

「でしようね」

「認めるの！」

「当たり前でしょ！ とりあえずあんたの職業は何だ、言ってみろ」

「巫女です、巫女さんです」

半泣きになりながらも優衣は健気に答える。まあ、この場合健気かどうかは分からないが、それでも美羽の尋問は終わらなかった。

「っで、あんたが今日やる仕事は？」

「拝殿の雑巾掛け」

「それがなんでこんな所で缶蹴りなんてやってるのかな？」

「いや、子供達に遊ぼうって誘われると断れなくて」

「そう、それわよかったわね。もう子供達帰ったみたいだから」

「ええっ、また私のこと見捨てたの！」

「あの子達もなかなか学習能力があるわね」

「う、裏切り者！」

「はいはい、じゃあ仕事に戻るわよ」

そのまま美羽は優衣を引き摺り、拝殿へと向かっていった。

「とりあえず、雑巾と水の入ったバケツは用意しておいたから、後はちゃんと雑巾掛けやんのよ」

「けどさ、なんで雑巾なのかな」

「はあ？」

「いや、モップとかなら楽じゃない」

「まあ、確かにそうかもしれないけど。神社の一角をモップで掃除するのもシニールじゃないか」

「そんなことないよ。たとえ古い建造物でも最新の器具で掃除してるじゃん」

「というか、もういい加減に楽したいと言え」

「楽に掃除がしたい！」

「本当に言いやがったな…こいつ」

「えっへん！」

「いや、胸をはれる事じゃないから。それとウチの神社にはモップはありません。モップが欲しければ自費で買ってきて来い」

「がーんとシヨックを受ける優衣だが、すぐに立ち上がると美羽の肩に手を掛ける。」

「じゃあ、割り勘ということだ」

「何故私がお金を出さねばならない」

「だって、美羽だって拝殿の掃除するでしょ。そのときモップを使えば楽じゃん、だから一緒に使うということだ」

美羽は大きく溜息を付くと、今度は逆に美羽が優衣の肩に手を掛けた。

「残念だったね優衣。私、拝殿の掃除とかあまりやらないから」

「そんなのずるい！ えこひいきだ」

「ならあんたも社務所の仕事を覚えろ」

「ぐっ」

「というか、せめてパソコンぐらい使えるようになれ」

「うっ」

「じゃあ、後は任せたわよ」

そう言って立ち去っていく美羽の背中をにらみつけた後、優衣は溜息を付いて雑巾をバケツの中に入れるのだった。

「拝殿の掃除終わりました」

「おー、お疲れ様」

「あれ、大輝さんは？」

社務所に帰った優衣を出迎えたのは神主の大輝ではなく、パソコンの前で操作をしている美羽だった。

「んー、用事が有るとか言って今は出かけてる」

「はあ、私もお使いでいいから出かけたいな」

「あんたの場合、そのまま遊ぶだろ」

「あははっ」

はいはい、最後は笑って誤魔化しました。

「それにしても、雑巾掛けてどうしてこんなにも腰が痛くなるのかな」

「腰曲げて走るんだから、結構腰に負担がかかってるんですよ」

「おお、なるほど！」

「いや、別にそこまで感心するほどじゃないぞ」

「ということは、腰を曲げずに雑巾掛けをやらばいいんだ」

「……いったいどうやってだ？」

「ん、ほふくぜんしんとか」

「どれだけ時間がかかるんだよ。それにそれだと自分も汚れないかなにせ床に這いつくばってるんだし」

「そう、まさに一石二鳥」

「一応言っておくがオチでないぞ」

「あははっ」

いや、今回は笑ってもオチないぞ。

## 腰は大事に（後書き）

私の作品を読んでくださっている方がお気づきかもしれませんが、このみこみこは以前、短編で投稿した物なのです。

それが何故か続きが降りてきてしまつて、まいっか、連載にしちまえということと連載のみこみが始まったわけですが、すでに別の連載を書いてる私には結構な負担で更新が届こうと思うので、お願いですから、長い目で見てやってください、お願いします。

そんなワケで、もしかしたら自分で自分の首を絞めているんじゃないかと思つた葵夢幻でした。

## 巫女萌え

「境内の掃除終わりました」

「おー、お疲れ様。結構早かったって事は今日はサボらなかったみたいね」

「うー、私だってちゃんと仕事をしてる時があるよ」

「普通なら毎日ちゃんと仕事をする物だ」

「あははっ」

笑って誤魔化した後、優衣は美羽が今仕事をしている机の横、一応自分の机に腰をかけた。

「そういえば、大輝さんは？」

「あー、なんか今日新しい人が来るからって迎えに行ってる」

「バイトの人？」

「いや、ちゃんと巫女の資格を持つてる人みたいだよ」

「へえー、珍しいね。今時巫女の資格を持つてるなんて」

「それは巫女のアンタが言う言葉か」

「それにしても、なんで巫女になんてなったんだろうねその人？」

「それも巫女のアンタが言う言葉か。それにアンタはどうなのよ、どうして巫女になってるわけ」

「私？ 私は元々ここでバイト巫女をしてて、なんか就職活動するのも面倒なってるってたら、いつの間にか正式な巫女になった」

「まあ、確かに巫女には正式な資格は要らないけど、アンの場合ここに居たほうが楽できると思ったからじゃないか」

「だよー。神社ってそんなに人が来ないし普段の日は結構暇だし、接客業としては最高だよ」

「いや、少しは否定しろよ」

「でも事実じゃん」

「その前に巫女として、いや、人間として否定しろ」

「うー、そういう美羽はどうして巫女やってんのよ」



「私はちゃんと神道系の大学を出てから、この神社に赴任してきたのよ」

「美羽、大学出てるの！ その前に神道系の大学って何？」

「あんな、一応神社で働く巫女としてそれぐらい知っておけよ」

それから美羽は大学のことや、神道のことを事細かく優衣に説明してやった。それこそ優衣が「もういいよ」というぐらいに。

それから数十分後。

「ただいま」

「あつ、大輝さんおかえりなさい」

「おかえり」

大輝が帰ってきた。大輝は二人の社務所の掲示板の前に呼ぶと、外で待っているのか、一度外に出て中に入るように促した。

「こんにちわー！」

そして中に入ってきた新しい巫女さんは元気が良すぎるほどの挨拶をした後、二人の前に立つ。

「七海皆獲君だ。ななみみなえ今日からこの神社で二人と同様に住み込みで働いてもらうことになった」

大輝は簡単に皆獲を紹介すると皆獲は前に出て大きく頭を一回下げた。

「そんなワケでお二方ともよろしくお願いします」

「私は染野美羽そめのみうこちらこそよろしくね」

「浅井優衣あさいゆういそんなわけでヨロー」

「あんなね、ちゃんと自己紹介しなさいよ」

「そういえば皆獲はどうして巫女になったの」

無視かよ、しかも直球だよ、そしてもう呼び捨てかよ。突っ込みどころ満載で私には突っ込みきれん。

「私、ずっと憧れてたんですよ。巫女さんに」

「へえ、珍しいね、巫女に憧れるなんて」

「一応あんたもその巫女だぞ。つで、憧れの巫女になった感想は？」  
「はい、やっと念願の巫女のコスプレができて感激です」  
「コスプレいうな！　というか憧れてたってそっちかい」  
「はい、メイドとどちらにしようかなと思ったんですけど、巫女の  
ほうがコスプレしながら働ける先が多かったんで巫女になったんで  
すよ」  
「あんたは巫女服が着たくて巫女になったんかい」  
「はい、だってコスプレしながら働けるなんて最高じゃないですか。  
まさに一石二鳥」  
「だよ、こんな楽な仕事って他に無いから最高だよ」  
「はい、そうですよ」  
「うんうん、そうだよ」  
何だろ、この二人、何故か同じようなにおいがあるんだけど。  
「そうだ。優衣さん、ちょっとお願いがあるんですけど」  
「んっ、なに、何でも言ってごらん」  
さっそく先輩ぶってるよ、こいつは。  
「後で私の写真をとって欲しいんですよ」  
「写真？　なんで」  
「はい、写真集にして今度のコミケで売るんですよ」  
「コミケって、あんたオタクかい！」  
「はい、そうですよ。私はコスプレオタクですよ」  
「……いや、もう、なんと突っ込んでいいやら。」  
「了解、そういうことなら協力するよ」  
「やってもいいけど、仕事が終わってからにしろよ」  
「う、分かってるよ。それで、どこまで脱ぐの」  
「いきなりそっちかい！」  
「やっぱり和服は半脱ぎが一番です」  
「あんたもやる気かい！」  
「ちっちゃちつ、美羽は分かってないな」  
「何がよ」

「男は狼、狼だよ。だから少しでもエロを入れれば売れること間違いないし！」

「いや、そうかもしれないけど。その発言は女としてどうかと」

「美羽さん、頭が古いですよ。今では女もそれぐらいやらないといけないんです」

「というか、あんたらのような奴が日本をダメにしていくんじゃないか」

「いいや違う。これは退化ではない、進化なのだよ美羽」

「そうです。優衣さんの言うとおりです」

『あゝはっはっは』

声を揃えて笑う二人を見て美羽は頭を抱えて溜息を付く。

えっと、つまり、私の頭痛の種が増えたってこと…。

……合掌。

するな！

## 巫女萌え（後書き）

そんなワケでみこみこ第二話でした。

まあ通じてる人はこの作品のモデルを分かってるかもしれないけど、あくまでも参考になっているだけで盗作ではないですよ。なのであまり深く考えずにみこみこをお楽しみください。

そんなワケでここまで読んでくださりありがとうございました、そしてこれからもヨロー。

以上、ついにネタがきれた（二話でかい）葵夢幻でした。

## 巫女派？メイド派？

「お邪魔しまーす！」

そう元氣よく美羽の部屋に入ってきたのは優衣。そしてここは岩城神社の裏手にある、住み込みで働く巫女達に立てられた寮だ。

岩城神社自体、かなり辺ぴなところに建っているので寮が設けられている。

「おー、いらつしゃい。といつてもさつき分かれたばかりだけどね」  
美羽はキッチンから顔を出すことなく、優衣を招き入れた。

美羽の部屋は2LK、寮としてはかなり優遇されており、キッチンも対面式と設備も意外と良かったりもする。

優衣はリビング置いてあるクッションに腰を下ろして、まるで自分の部屋の用にくつろぐ。

「まあ同じところに住んでるんだから当たり前だけど、やっぱり挨拶は大事だよ」

「へえー、あんたにしてはまともなことを言うわね」

「しょせん社交辞令だけどね」

「そういうことはつきりと口にするな！ それにしてもあんた、その格好は何とかならないのか？」

「そんなに变？」

「いや、变というか、いくら部屋着とはいえ長襦袢ながじゅばんをそのまま着てるのはどうかと思うぞ」

「えー、美羽だって同じじゃない」

「私はちゃんと仕事用、部屋着用で分けてるし、今は羽織を羽織ってるでしょう」

だが優衣は小さく声で不満を漏らす。

「どっちにしる変わらないじゃん。それに美羽だってその姿でキッチンで料理してるじゃん」

「ないか言ったか」

「いやいや、別に何も言ってないよ」

「それに今日は皆穫の歓迎会でしょ。その発案者がそんなラフな格好でいいのか」

「いやいや美羽、新しく入ってきた仲間だからこそ、普段の自分を見せるんじゃない。ここで堅苦しい歓迎会をやっても打ち解けられないでしょ」

「いや、そうかもしれないけど」

長襦袢も着るにしてもちゃんと着ろよ。少々はだけてるし、下手すると見えるぞ。

「それで、皆穫は？」

「んー、なんか歓迎されるだけだと申し訳ないので、少し手伝っために準備するって言ってた」

「皆穫もそこまで気を使わなくてもいいのにね」

「そうだね。けど、初めて見知った仲で只歓迎されるのも気が引けるんじゃない」

「まあ、そうかもしれないけどね」

「それに皆穫のことだから、絶対になにかやってくるよ!」

そうだった! 皆穫はこいつと一緒に私の頭痛の種だった。……けどまあ、今はプライベートだから、そんなに突っ込むこともないでしょ。

「お邪魔しまーす」

「おっ、噂をすれば来たみたいだよ」

「今日は私のために歓迎会を開いてもらって、ありがとうございます」

そういつて入ってきた皆穫を見て、優衣は快く向かい入れたが、美羽は手が止まりその場で固まってしまった。

「あつ、これ飲み物です。皆で飲むように用意してきました」

「おおっ、ありがとう」

「それと美羽さん、お手伝いします。新参者とはいえただ歓迎されるのもあれなので」

「……」

「美羽さん」

「みーう」

「はっ、いかんいかん、つい我を忘れていた」

「どうしたんですか美羽さん、なにかショックなことでもあったんですか」

「あんたの今の格好に凄いショックを受けたのよ」

「えゝ、そんなに変ですか？」

「そんなことないよ、凄く似合ってるよ」

「いや、似合ってるとかそれ以前に、なんでメイド服を着てるんだ！」

「何を言ってるんですか美羽さん。お手伝いといえばメイド、これ以上のものが何処に存在すると思ってるんですか」

「いやいやいやいや、なんとなくは理解できるが、誰もそこまで要求してないから。」

「うんうん、そうだね。やっぱりそこまでしないと意味がないよね」

「いやいやいやいやいや、ちょっと待て、私にはそこでする意味がまったく分からね。」

「それじゃあ美羽さん、お手伝いしますね」

「ああ、じゃあ、その出来上がったものをテーブルに持ってってくれる」

「はい」

皆穫はキッチンの端に置かれているお皿を持つと、優衣が居るテーブルへと持っていく。その姿はさながらどこぞの喫茶店を感じさせるものがあつた。

「おおっ、こういう風に料理を持ってこられると、どこかの喫茶店に行ってるみたいだね」

「私の部屋はいつからどこかの喫茶店になったんだ」

「でもさ、でもさ。メイドさんにこういう風にされると、まるで自分が偉くなったように感じない？」

「というか、皆獲の本職はメイドじゃなくて巫女だぞ」

「それでもメイド服を着た皆獲に給仕されると本物のメイドみたいじゃない」

「えへへっ、ありがとうございます」

「そこはお礼を言うところなのか」

「これもメイド服に秘められたパワーなのかな？」

「どんなパワーだよ」

「要するに、メイド萌えだよ！」

いや、そんな親指を立てて力説させても困るんだが。

「さすが優衣さん。よく分かってらっしゃる。やはりメイドには、それなりに萌えパワーが秘められているんです」

萌えパワーっていったいなに！ もう私には付いていけん。

「だよ。こうやってメイドの皆獲をみると、私もメイドをやりたいなってくるよ」

「よくサボるあんたに、メイドなんて務まるわけないでしょ」

「それは違いますよ美羽さん」

「何がよ」

「コスプレとはなりきることから始まるんです」

「いつからコスプレの話になった。今までメイドの話をしてただろ」

「分かってないですね美羽さん。今の日本に本物のメイドさんなんて、そう簡単に居ませんよ」

えっ、なんでそこだけ現実的なの？

「ですからコスプレでメイドの萌えパワーを補ってるんですよ」

「ということは、どこぞの喫茶店は萌えパワーの宝庫」

「まさにその通りです。あそここそコスプレメイドの聖地なんです」  
「そうだったんだ！」



……優衣、それはそこまでショックを受けることなのか？

「はあ、こっちは全部出来上がったから、二人とも遊んでないで運んでくれないか」

「あつ、はい、すいません」

「皆穫、がんばれ」

「あんたも運びなさい」

「うゝ、わかったよ」

こうしてテーブルの上には様々な料理が並び、各自のコップにはジュースが注がれた。

「それじゃあ、新しく入ってきた皆穫を祝して」

『かんぱーい』

乾杯を交わした後、それぞれ話に花を咲かせるが、皆穫は美羽をじつと見詰めていた。

「んっ、なに、どうしたの皆穫」

「うゝん、美羽さんの格好もなかなか萌えますね」

「はあ？」

「うんうん、なるほど。メイドも確かにいいけど、和服も何かしら惹かれる物が」

どんなんだよ。

「やはりメイドが一番人気があるとと思うのですが、和服や巫女もそれに負けずにマニアが多いことも確かですね」

皆穫、そういわれても私には付いていけん。

「やつぱり、巫女萌えも多いのかな」

「はい、今では着実にその数が増えているようです  
そんな統計を皆穫はとっているのか

「ということとはつまり……」

「つまり何なのよ？」

「初詣や神社の祭りに来る人は巫女萌えが多い！」

「勝手に参拝客をそっちにもっていくな！」

「けど、そういう人がいることは確かですよ」  
いるのか…やっぱり。

「まあ、世の中にはいろいろな人がいるってことだよ」

「そうね、あんたらを見てるとそれが良く分かるわ」

「まさに十人十色ですね」

そうね、けど……あんた達はかなり特殊な色みたいね。もう私には何色なのかも理解が出来ん。

そんな美羽に関係なく、夜は更けていくのだった。

巫女派？　メイド派？（後書き）

そんなワケで今回はメイドを入れてみました。うーんやはり巫女のメイドの融合は難しい。そんなわけで今回はこんな形でお送りしました。

それではここまで読んでくださりありがとうございました。これからも更新が遅れるかもしれませんが、よろしく願います。以上、やっぱり巫女萌えの葵夢幻でした。

たまには過去を振り返って反省しろ！

「はい、今回は経費で落としてあげるけど、次は自費で払ってもら  
うからね」

「あははっ、ごめんね美羽、ほんと感謝するよ」

笑いながら謝って来る優衣を見て、美羽は大きく溜息を付いた。

「あなたの感謝は本当に薄っぺらく感じるわ」

「それは美羽の心が黒いからだよ」

「あんたが言うな！　　というか黒いって何だ黒いって、私はそんな  
に悪役か！」

「けど似合いそうだよ」

「勝手に決めるな！」

「ただ今戻りました」

そこへ買出しに出かけていた皆穫が戻ってきて、荷物をとりあえ  
ず自分の机の上に置くと二人に元へと向かった。

「何かあったんですか？」

「んー、美羽には悪役が似合うなって話をしてたの」

「お前はまだそれを引っ張るのか。皆穫、皆穫からも何か言っ  
てくれ」

「そうですね。やっぱり美羽さんには悪役より、ツインテール  
ですよ」

『はっ？』

突飛のない皆穫の発言に美羽と優衣は声も顔も揃えて、ワケが分  
からないという反応を示した。

「いや、なんで私はツインテールなんだ？」

「そんなの決まってるじゃないですか。それは美羽さんが……ツ  
ンデレだからです」

「ちよつと待て、いつから私はそんなキャラになったんだ」

「そんなの最初っから決まってるじゃないですか。そしてツインテ

ールはツンデレの象徴なんです。だから美羽さんにはツインテールが似合うんですよ」

「勝手に決めるな！」

「美羽の場合ツンデレっていうより、ツンツンしてるだけって感じがするけど」

「その原因のほとんどがお前のせいだろうが。うらっ、これを見てもそれが分かるだろ」

「美羽く、そんなに顔に押し付けられても見えないよ」

「何ですか、それ」

美羽は優衣の顔に貼り付けていた紙を皆獲に渡した。

「領収書、箒代。なんですか、これ？」

「こいつが近所の子供達と野球をやっててね。それで箒をバット代わりにして遊んでたら箒が壊れたのよ」

「いやく、見事に箒の芯に当たってホームランになったんだけどね。その代わりに箒が真ん中からぱつきりと折れちゃったの。やっぱり硬球だとボールの飛びが違うね」

「そういう問題じゃないでしょ」

「だから今度から軟球でやるよ」

「それも違う！ あんたはこの神社の巫女でしょ。巫女なら巫女らしく巫女の仕事をしなさい！」

「うく、ちよつと休憩ついでに野球をやっただけじゃん」

「それは休憩とは言わん、サボってるって言うんだ」

「まあまあ美羽さん、そんなに怒らなくても」

「はあ、私だって好きで言ってる訳じゃないわよ。まあ、私も時たまなら大目に見るけど、こいつは毎日のようにサボってるから言うてるだけよ」

「じゃあ、今度から一日おきにするよ」

「それは一日おきにサボるという宣言なのか」

「あははっ、けどさ神社の仕事って結構暇じゃない。だからあんまり問題ないんじゃない」

「仕事が暇だつて感じるのはあんたが仕事を覚えただけでしょ。ウチだって地鎮祭やら結婚式やら、いろいろとやってるのよ」

「え！ そうなの？」

「今までどんな仕事をしてきたんだお前は！」

「境内や本殿拝殿の掃除とか、社務所でのお守り売りとか、そんなんだけど」

「ああ、そういえばあんたそんなことばかりだったわね」

「おおつ、だから時々ウチの神社に人が集まるのは結婚式をやっていたからか」

「今頃気付いたんかい！」

「というか優衣さん、結婚式の準備とか結構忙しいですけど、そういったこともやったことないんですか」

「えっ、うーん、そうだな。……おおつ、そういえば、何か美羽に今忙しいからこれやれつて押し付けられることがたまにあるけど、あれそうなのかな」

「ああ、そうだよ。あれが結婚式の準備だよ」

「なるほど、そうだったんだ」

「優衣さん、今まで気付かずやってたんですか？」

「あははっ、私は言われたことだけやってるだけだから」

「そんなんだから仕事を覚えられないんじゃないのか」

「けど、今まで大輝さんに注意されたことないよ」

「それは只単に雑用係としか見てないからじゃないか」

「なるほど、つまり私は縁の下の力持ちなんだね」

「いや、あつてはいるけど。そこは悔しがるところじゃないのか」

「まあ、前向きだからいいんじゃないですか」

「そこまで前だけを見続けてどうする」

「えっ、えつと、……まあ、過去を悔やまずにすむのでは」

「せめて過去の過ちから何か反省して欲しいものだな。特にこいつは」

美羽は皆穂の方を見ながらも、親指で優衣を指差す。

「うゝ、私だっているいろと反省してるよ」

「ほう、例えば？」

「例えば、そうだね。昨日コロッケに醤油をかけちゃったから、今度からちゃんとソースか醤油かを確かめるようにしようとか。あとこの前の休日にいつもと同じように目覚ましをかけちゃったから、今度からちゃんと明日が休みか確かめるようにしてるよ」

「あんたの反省はその程度かい！」

「あの優衣さん、もう少し仕事のことで反省することはないんですか？」

「うゝん、そうだね。ない」

「はつきりと言いやがったな、こいつ」

「優衣さゝん、それだとフォローできませんよ」

半泣きになる皆穂を見て、さすがの美羽も大きく溜息を付いた。そして当本人である優衣はというと、いつものように最後は笑って誤魔化すのであった。

たまには過去を振り返って反省しろ！（後書き）

そんなワケでお送りしました今回のみこみこ。なんといいましょ  
うか、文章のほとんどが台詞というのも結構珍しい小説なのではな  
いかと、最近思い始めました。

うーん、けど、書いてるとどうしても台詞が多くなるというか、  
ほとんど台詞になる。これはいいのだろうか、最近ちょっと心配  
になってきた。

それでも、面白ければまあいいかと開き直ったりもします。  
それではここまで読んでくださりありがとうございました。これ  
からもよろしく願います。

以上、なかなかみこみこのネタが出てこない夢夢幻でした。



## 祭りの準備 その1

大小、どんな神社にも関わらずお祭りという物は有る物で、この岩城神社にも祭りの時期が迫っていた。

「それじゃあ、各自の役割を発表するわよ」

「美羽、その前に大輝さんは？」

「ああ、出店の割り振りをかねて、商店街でいろいろとやってるみたいよ」

「神主さんも大変ですね」

「まあ、神社にとっては大忙しの行事だからね。今年も地獄のような忙しさになるんじゃない」

「はあ、それを思うと、私もたまにはお祭りを楽しみたい！ って思うよ」

「なら他の神社のお祭りに行けよ」

「けどさ、他の神社は遠いじゃん。だからそこまでして行きたいとも思わないんだよね」

「結局どっちなんだよ、お前は」

「まあ、優衣さんの気持ちも分からなくは無いですよ」

「そうかもね」

「ええ、なにせ巫女さんは目の保養になりますから。もう巫女萌えにはたまりません」

「結局皆獲はそっちな！」

「けど、ウチの神社にもそういう人が来るんじゃない」

…… 優衣、あまり否定できない発言はしないでくれ。

「なにせ巫女といえば清楚で可憐な感じがするから、巫女萌えの人はそこが好きなんじゃない」

「さすが優衣さん、よく分かってらっしゃる」

「はあ、清楚で可憐ね。優衣、初恋クラッシャーの発言とは思えないわね」

「美羽さん、何ですか初恋クラツシャーって？」

皆穫の問いに美羽は大きく溜息を付き、優衣はその様子を頬を膨らませながら見ていた。

「皆穫、優衣が目を細めながら箒を持つてる姿を想像してごらん」

「えっ、何ですか？」

「まあ、やってみれば分かるわよ」

そう言われたから皆穫は優衣に目を向ける。未だに不機嫌な顔をしているが普段の顔を思い浮かべる。

優衣は瞳が大きい、顔の形は整っており、その目を細めるととても大人っぽく、そして清楚で可憐に見てもしょうがない。

そんな優衣が静かに箒を持って掃除をしている姿を皆穫は心に思い描く。

「さすが優衣さん、見事です！」

ぐっ、と親指を立ててくる皆穫を見て、優衣は複雑な表情になる。

「分かった。優衣が眠そうな顔をして掃除をしていると、とても清楚で可憐で大人っぽく見えるのよ」

「ええ、よく分かります」

「だからよくここに遊びに来る、男の子達がいるでしょ」

「よく優衣さんと遊んでる子達ですね」

「そう、その中の数人がそんな優衣の姿を見て初恋を覚えるのよ」

「分かります。神社で静かに掃除をする可憐な巫女さん。もの凄く絵になりますよ」

「でしょ。でも口を開くとこんなだから、優衣に初恋した男の子達は数分の内に現実と第一印象がまったく違うことを覚えるというわけよ」

「……えっと、つまり、清楚で可憐で大人っぽい人だと思ったのが、実はその……」

「皆穫、そこははっきりとバカでアホでガキっぽいってはっきり言っているわよ」

「うっ、美羽もそこまで言わなくてもいいじゃん」

「まあそうかもしれないけど、現実と優衣の印象がまったく違うことは確かでしょ」

「だってそれは私にはどうしようもない事だよ。だから私に罪は無いもん」

「まあどつちにしろ、優衣が初恋クラッシュヤーだということが分かった、皆穫」

「えっと、はい、よく分かりました」

「うゝ、皆穫も少しはフォローしてよ」

「優衣さん、無理ですよゝ」

「うゝ」

「はいはい、そこまでにして」

美羽は手を叩くと、改めて机においてある紙を手取る。

「それじゃあ、お祭りの役割を発表するわよ」

「はい」

「ええ」

「とりあえず、優衣はいつもどおりに社務所でお守りや絵馬の販売とバイトの子達の面倒を見てあげて」

「本当、いつもどおりだね」

「というか優衣さんにバイトの子達を任せて大丈夫なんですか」

「みゝなゝゝゝ、それはどういう意味かな」

「優衣さん、顔が怖いですよ」

「それは大丈夫よ皆穫、優衣はこう見えても長年この神社で働いてるから、特に販売所のところはよく分かってるし、何故か、こう見ても人望だけはあるからバイトの子達も優衣の言うことはちゃんと聞いてくれるのよ」

「へえゝ、そうなんですか」

「皆穫、なにその、意外です、って言う顔は」

「えっ、そんな顔してないですよ」

「ほづ、なら鏡でもってこようか」

「はいはい、そこまでにして。それで私は大輝さんと祭事を行って

るから、皆穫はその補助役をお願い」

「補助役って、何をすればいいんですか？」

「簡単に言つと、祭事がスムーズに進むように前準備や、後片付けをやつてもらうわけだけど、祭事は一度リハーサルのようなことをやるから、細かいことはその時にね」

「あつ、はい、分かりました」

「さて、ここからが問題なのよね」

美羽は紙を机の上に戻して疲れた顔になり、優衣は何故かじゃんけんで勝つために手を組んでその中を覗いていた。

「えつと、何をやるんですか？」

「今年は皆穫はやらないけど、来年までには覚えてもらつから」

「だから、何をですか」

「神楽よ」

「ああ、神楽ですか。それで何でお二人はじゃんけんをしようとしてるんですか？」

「ウチの神社はお祭りの時には必ず一人の巫女が神楽を舞わないといけないのよ。だからどっちが神楽を舞うか、いつもじゃんけんで決めてんの」

「えつと、そんなに嫌なんですか。神楽を舞うのは」

「というかね。お祭りの準備だけでも忙しいのに、神楽の稽古まで追加されるんだよ。もう正直、死んじゃうくらいの忙しさだよ」

「それは大変ですね」

「ちなみに来年の神楽は皆穫が舞うことに決まつてるから」

「何ですかー！」

「皆穫、一応あなた新人でしょ。だから必ず一度は神楽を舞つておかないといけないの、わかつた」

「はい、分かりました」

「さて、じゃあやりますか」

優衣と美羽は凄い意気込みでその場から立ち上がる。

「去年は負けただけど、今年は勝たせてもらつよ」

「優衣と違って私は忙しいのよ。だから今年も優衣に舞って貰うからね」

「なんか、お二人とも凄い気迫ですね」

火花を散らしながら優衣と美羽は大きく手を上げ。

『じゃんけん、ぽん』

勢いよく振り下ろした。

ちなみに結果は美羽がグーで、優衣がチョキである。

「よし、今年も勝った」

「うゝ、また負けた。後出しだー！」

「変ないちやもんつけるな！」

こうして岩城神社の祭りは、その準備に取り掛かっていくのだった。

## 祭りの準備 その1（後書き）

そんなワケで今まで一話完結で話を進めてきましたが、今回は珍しく続き物です。

まあ、とに理由は無いのですが、というか只単に一話完結のネタが無いだけなんですけどね。

ではここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしく願います。

以上、お祭りには巫女さん目当てで行く葵夢幻でした。

## 祭りの準備 その2

「はい」

自室でくつろいでいた皆穫だが、突然ドアがノックされたので、ドアを開けた。

「うわぁ」

そのにはまるでホラー小説に出てくるように、たたずんでいる巫女の姿があった。そしてその巫女は皆穫に向かって倒れこみ、皆穫は思わずそれを避けてしまった。

結果、その巫女は床に頭を思いっきりぶつけることになる。

「うゝ、皆穫ゝ、避けないで支えてよゝ」

「えっ、優衣さんですか」

「そっだよ」

「いや、なんか、どこかの幽霊かと思っちゃいました」

「それくらい疲れてるんだよ。いいから起こして」

優衣さん、それは 子に見えるほど疲れてるって言うことでしょ  
うか？

とりあえず皆穫は優衣に肩を貸して、なんとかリビングのソファ  
ーに座らせることが出来た。

「皆穫ゝ、ご飯ゝ」

「人の部屋にきて第一声がそれですか」

「だってゝ、もう疲れて何もやる気がしないんだよ」

「お祭りの前だからといって、そんなに忙しいもんなんですか」

「私の場合は神楽の稽古があるでしょ。だから昼間はバイトの子達の  
面倒を見て、夜は神楽の稽古をさっきまでやってたんだよ。だか  
らもう、何もやる気がおきない」

「それで人の部屋にご飯をたかりに来たんですね」

「そっいうこと」

相変わらずあっさりと認めるんですね。というか優衣さんには遠

慮という言葉は知らないんでしょうか。

「皆穫が作る分を倍にしてくれればいいから」

「私はさつき晩御飯を食べ終えましたよ」

「それじゃあ、私の分も作って」

「優衣さん、人に物を頼む礼儀という物を知っていますか？」

「疲れてるから、そこら辺は省略で」

「はあ、優衣さん、本当に疲れてるんですね」

「だから、さつきからそう言ってるじゃん」

「はいはい、分かりました。じゃあ、準備し…」

そのとき再び部屋のドアがノックされる。

「あつ、はい」

とりあえず優衣のことをは放っておき、皆穫はドアを開けると、そこには美羽が立っていた。

「おーっす、皆穫、もしかして優衣来てない？」

「優衣さんならソファで死んでますけど」

「ああ、やつぱり」

死んでるってところは否定しないんですね。

「とりあえず、上がらせてもらっわよ」

「えっ、あつ、はい」

そのまま二人はリビングまで行き、美羽はソファで死んでる優衣を発見する。

「おお、おお、やつぱりこうなってたか」

「美羽さん、なんか心当たりでも？」

「むろん大有りよ。神楽の稽古をしている先生が厳しくてね。去年もそうだったけど、優衣は神楽の稽古が終わった後は、必ず私のところにたかりに来てたのよ。もう疲れて何もやる気がしないってね。まさしく、今がその状態です。」

「そんな訳で、はいこれ」

そう言って美羽が差し出したのはレジ袋だった。

「なんですか、これ？」



「食料」

「めし！」

優衣さん、そこに反応するほどお腹がすいてるんですか。

「とりあえず、商店街の人と打ち合わせをするついでに、スーパーでウナギを買ってきたから」

「随分と奮発しましたね」

「まあ、去年の経験から今のうちに精の付く物を食べさせておかないと、祭りの前に倒れかけないからね。だから今日は特別に優衣に食べさせてやろうと買ってきたの」

「その割には二つ入ってるんですけど」

「ああ、もう一個は私の分」

美羽さんまで私にたかるつもりですか。

「とりあえず、暖めるだけでいいみたいだからお願いね」

「えっと、それは私に二人分のご飯を用意しろと」

「私も祭事の準備やら出店関係者との打ち合わせやらで忙しかったのよ。でも、皆穫はあまり忙しくなかったでしょ」

「まあ、確かに、私は拝殿や本殿の掃除を念入りにやってただけでしたから」

「だから一番疲れてない、皆穫が私達の晩御飯を作るの！」

「なにか納得する部分と納得できない部分があるんですけど」

「皆穫」

「なんですか優衣さん」

「世の中に矛盾は付き物だよ」

「いや、そんな親指を立てて力説されても困るんですけど」

「そんなわけでよろしくー」

「美羽さん、はあ」

結局、皆穫は美羽の買ってきたウナギを暖めて、二人分のご飯を用意すると、二人が待っているリビングのテーブルに差し出した。

「あつ、皆穫、何か飲み物」

「私もお願い」

はいはい、もう分かりましたよ。

皆穫は水をコップに注ぐとその中に氷を入れて二人に差し出したのだが、二人はすでに食事を始めていた。

という優衣さん、すごい食欲なんですよ。

「優衣、もう少し落ち着いて食べなさいよ」

「しゃって、おひやかしゆいてんしゃもん」

「とりあえず口の中のものが無くなってから喋れ」

いや、優衣さん、美羽さんにそう言われたからって、一気に飲み込む必要も無いと思うんですけど。

「だって、神楽の稽古でさんざん体を動かしてきたんだよ。そりゃ、お腹だって減るよ」

「いや、それは分かってるけど、とりあえず落ち着いて食べろと言ってるんだ」

「はいはい、わかりましたよ」

いや、優衣さん。また一気にかき込むってことは全然分かってないって事ですよ。

「おちゃわり」

優衣は思いつきり空になったお茶碗を皆穫に差し出すのだった。

「はぁ、はい」

「んぐつ、ありがとう皆穫」

「だからあんたは落ち着いて食べなさい」

ああ、もう、ボケとツツコミがエンドレスなんですけど。

半泣きになる皆穫を放っておいて、二人の食事は当分終わりそうにも無かった。

## 祭りの準備 その2（後書き）

そんな訳でなかなか更新できないみこみこですが、とりあえず六話まで書き終えました。

というか連載を二本同時にやっている時点で自分の首を絞めてるんじゃないのか、でも始めてしまったものはしょうがない。そんな訳でこれからもみこみこは更新が遅れると思いますが、どうか見捨てずによりしく願います。（というかエレメが盛り上がってきちゃったから、みこみこはなかなか書けないかも）

それではここまで読んでくださり、ありがとうございます。そしてこれからもよりしく願います。

以上、みこみこちゃんと書かないとなと思い始めた葵夢幻でした。

### 祭りの準備 その3

「それじゃあ、今日の作業を簡単に説明しますね」

大勢のバイト巫女を前にして優衣はダンボールから袋にまとめて入ってあるお守り、そして絵馬を取り出した。

「今日は届いたこのお守りを所定の位置に整理してもらって、あとは絵馬と破魔矢も同じように整理してもらってから。えっと、それじゃあ……」

「優衣さんいますかー」

そんな時に突然、皆穫が社務所の売り場に顔を出した。

「ごめん、ちょっとまって。っで、なに皆穫？」

「美羽さんが祭事の飾り付けでバイトを何人が回して欲しいそうです」

「そうじゃあ、佐藤さんと鈴木さんと高橋さん。皆穫に付いて行って拝殿の方をお願いしますね」

『はい』

「じゃあ後は、田中さんと渡辺さんと伊藤さん、それに山本さんと中村さんはお守りの整理をお願い。後の人たちは絵馬と破魔矢の整理ね」

『はい、分かりました』

「あのー」

ぼーっとしていた皆穫にバイトの巫女が声をかけてきた。どうやら指示を待っているようだ。

「あつ、うん、ごめんね、じゃあこっちに来て」

『はい』

「それにしてもびっくりしました」

その日の夕食時。いつもと同じように皆穫の部屋にたかりに来た

優衣と美羽に、皆穫は口を開いた

「なにが？」

突然そんなことをいわれても分からないだろうと、美羽が聞き返す。

「今日美羽さんの用事で売り場に顔を出したじゃないですか」

「それがどうかしたの？」

「いや、優衣さんがちゃんとバイトの人達を仕切ってるからびっくりしたって話なんですけど」

「もしかしくなくても、それは褒められてないよね」

「いえ、そんなことはないですよ。…だから、そんな怖い顔しないでください」

「うー、私そんなに怖い顔してないよ」

「あんたはそのオーラだけで人を脅すことが出来るのよ」

「勝手に人の特技を作らないでよ！」

「けど、優衣さんのオーラには鬼気迫るものが…」

「何か言った、皆穫」

「いえ、なんでもないですよ」

「まあ、皆穫の気持ちも分からなくも無いけどね」

「うー、それって、そんなに私が怖いって事？」

「違うわよ。真面目に働いてるあんたが珍しいって事よ」

「うー、私だってやらなきゃいけない時はやってるよ」

「それ以外はサボってばっかだけどね」

「……そうだね」

「って、反論なしかい！」

「えー、だって、事実だし」

「それは自白しているのか」

「違うよ。私はちゃんと現実を見詰めて真実を述べただけだよ」

「要するに、普段から真面目に仕事して無いと認識はしているんだな」

「それとこれとは話が別だよ」

「いや、一緒だから」

「だって、普段と忙しい時はまったく違うじゃん」

「いやいや、だから一緒だって。例えば普段が暇だろうが、今が慌しいのだろうが、巫女としてやることは一緒だから」

「……………まあ、そこら辺は大目に見てよ」

「お前が言っな！」

「まあまあ、美羽さん」

「皆穫、あなたまで優衣のようになっちゃダメよ」

「なんで、突然私に振るんですか」

「念のためよ！」

「私は普段でも真面目に働いてますよ」

半泣きになる皆穫を無視して、美羽は思いつき優衣を指差した。

「と・に・か・く、優衣は普段でも真面目に働きなさい」

「うー、そんなにやることがあるわけじゃないから良いじゃん」

「よくない！」

「そういう美羽は今日なにやってたんだよ」

「私？ 私は拝殿の飾り付けやら祭事のリハーサルやらで忙しかつたわよ」

「でもお祭りが終わったら、また暇になるじゃない」

「それはあんただけだ。私はお祭りでの収支の計算やら、手伝ってもらった人や奉納してもらった人への挨拶回りで、お祭りが終わっても忙しいの」

「へえ、美羽って、そんなことまでしてたんだ」

「お前はどの神社で何年働いてんだ」

「あははっ、私はお祭りの後はその疲れでずっと寝てることが多いから」

「それは今年も祭りの後に有給を取っていると告白してるのか」

「あ、いいですね、それ」

「皆穫も乗るな！」

「え、だって、今は目が回るぐらいの忙しさですよ。お祭りが終

わった後ぐらいゆつくりしたいじゃないですか」

「そうだよ〜」

「あんたらは後片付けという言葉を知らんのか」

「……美羽さん、ファイト」

「そんな応援、いらんわ!」

「美羽、これも運命だから」

「私の運命はお前に決められるのか!」

「けど、そういう仕事って美羽さんがやるように思えて、とても手  
伝おうとは思えないんですよ」

「それは手伝う気が無いだけでしょ!」

「違うよ美羽。なんていうかな〜、なんかこう、美羽の仕事には手  
が出しづらいんだよ」

「そうなんですよね。なんか、手を出したら邪魔かなって思っちゃ  
うんですよ」

「分かんないかな〜、この感じが。ねえ、美羽〜」

「いや、なんとなくは分かるが、とりあえず手伝ってくれ」

「無理」

「お任せします」

「納得いかねー!」

そんな感じでいつそう慌しくなっていく岩城神社であった。

### 祭りの準備 その3（後書き）

ぐげごつぱつと、思いつきり風邪ひいた。

そんな訳で、只でさえ更新が遅れ気味のみこみこがずいぶんとまた更新が遅れました。

というか、普段でもネタが無いのに、風邪ひいてる時なんて何も浮かんでこやしねえ。もういい加減に治って欲しいです。

では、ここまで読んでくださりありがとうございます。そしてこれからもよろしく願います。

以上、最近ちょっと風邪が治り始めた葵夢幻でした。



## 前夜祭 前

「いや、それにしてもだいぶ騒がしくなってきたね」

「そうですね。明日がお祭りなのに今から出店の準備をしている人もいますから」

賽銭箱の前で優衣と皆穫は祭りの準備が進められている境内を眺めていた。

「とゆうか、優衣さん。こんなところで油売っていいんですか」

「皆穫、皆穫がそれを行っちゃおしまいだよ」

えっと、何がお終いなんでしょうか。

「私は今日の仕事は全部片付けたんだよ。まあ、夜に神楽の稽古があるけどね」

「と言いますか、もうそろそろ夕暮れなんですけど」

「だから、こうして休憩をして英気を養ってるんじゃない」

とてもそういう風には見えませんでした。というか、それは優衣さんの日頃の行いの所為でしょうか。

「そういう皆穫は大丈夫なの、こんなところにいて」

「はい、私は新人なので今回は軽く手伝うだけですから」

「ああ、そういうばそうだったね。ということは来年の今頃は右往左往しているわけだ」

それは何の予言なんですか、優衣さん。

「そつえば、美羽は？」

「美羽さんは、集会所でお祭りに関わってくれた人達を接待してますけど」

「ああ、それは美羽も大変だね」

やっぱり、それを聞いても美羽さんを手伝いに行こうとは思いませんですね。まあ、その気持ちは分かりますけど。

「というか皆穫は美羽を手伝いに行かないの？」

「優衣さん、それを優衣さんが言いますか」

「いや、だって、皆穫の今年の仕事は美羽のサポートでしょ。だから、てつきり美羽と一緒に仕事しているものだ」と

「まあ、確かにさっきまで私も集会所で手伝ってましたけど、近所の奥さん達が手伝いに来てくれて、だから私も休憩中です」

「そっか、いいな、誰か私の仕事も手伝ってくれないかな」

優衣さん、それはこんな所で油を売ってる優衣さんが言っではない言葉だと思うのですけど。

「というか、優衣さんは美羽さんの手伝いに行かないんですか？」

「絶対にヤダ」

「即答ですね」

「だって、私これから神楽の稽古があるし、明日が本番だから先生も気合が入りまくってるし、本当なら前夜祭を放り出して帰って寝たいよ」

「前夜祭って、何やるんですか？」

「皆穫聞いてないの！」

いや、そこまで驚くことではないと思うんですけど。

「ええ、何も」

「くそ、美羽の奴、皆穫じゃなくて私に手伝わせる気だな」

「えっと、何かあるんですか？」

「うん、前夜祭でも一応、祝詞を捧げたりと祭事が少しあるんだよ」

「はあ、そうだったんですか」

「じゃあ皆穫、私は神楽の稽古に行つて来るから」

何でいきなりやる気を出すんですか。というか、もしかして私に押し付ける気ですか。

「はいはい、残念でした。逃がさないわよ、ゆーい」

「あつ、美羽さん」

「ぐつ、美羽、入ってるから、入ってるから離して」

美羽は完全に優衣の首をロックしているみたいで、美羽の腕の中で優衣は必至にもがいていた。

「じゃあ、神楽の稽古は前夜祭が終わってからね。もう、先生にも

そう告げてあるから」

「うぐぐつ」

苦しいのか、それとも先手を打たれたことが悔しいのか優衣は変な喚き声を上げる。その姿にさすがに見かねた美羽は、優衣を離して解放した。

「うゝ、いいじゃん、今年は皆穫がいるんだから皆穫にやらせれば」  
「ダメよ。大輝さんが今年は優衣にやらせて、皆穫に覚えさせるんだから」

「ということは、来年は私がやることは決まってるんですね」

「新人だもの、当然でしょ。何事も経験よ、経験」

はあ、分かりましたよゝ。

「だいいち、そんなに難しくないんだから、皆穫にちよつと教えて覚えさせればいいじゃん」

「皆穫は本祭の方で手一杯だろうから、前夜祭は優衣がやれだそうよ」

「うゝ、祭事といっても前夜祭は大輝さんの後ろに控えて、必要なものを手渡すだけじゃん」

「そうだけど、渡す順番とか、そういうのを皆穫に覚えさせるためにあんたがやるの」

「はあ、だったら神楽の稽古をなくして欲しい」

「あつ、先生からの伝言だけど、今夜は完璧になるまで帰さないだつて。まあ、明日が本番なんだからしょうがないでしょ」

「うつつ、完全に他人事だゝ。裏切り者ゝ」

いや、優衣さん、別に裏切り者ではないと思うんですけど。

「じゃあ、頼んだわよ、優衣。さて、それじゃあ…」

「というか美羽さん、私てつきり仕事に戻るのかと思ったんですけど、何で賽銭箱の前の階段に座るんですか。」

「あゝ、美羽がサボってる」

「あんたが言うな！」

「うゝ、じゃあ、何でそんなところに座るわけ」

「休憩よ、休憩。私だって今日はさつきまで動きっぱなしだったから、さすがに疲れたのよ。それを見かねた大輝さんが前夜祭まで休んでいいって、言ってくれたのよ」

「うゝ、責任者公認でサボるなんてずるい」

「優衣さん、それは違うんじゃない」

「違うくないもん。サボりはサボりだもん」

「というか、日頃からサボってるあんたに言われたくないわ!」

「……そういえば、気の早いで店はもうやってるみたいだから、何か買ってこない?」

優衣さん、明らかにワザとらしいですよ。

「じゃあ、私は力キ氷、練乳がけで」

「私がパシリ!」

「あんたが言い出したんだから、あんたが買ってきてなさい。皆穫、皆穫は何にする」

「いえ、私は…」

「遠慮しないでいいわよ。全部優衣が払うんだから」

「オゴリ決定済み!」

美羽さん、さすがにそれはどうかと…。

「じゃあ、優衣さんと一緒に買出しに行ってきますね」

「皆穫ゝ、ありがとうゝ」

「優衣さん、何も泣かなくても」

「しょうがないわね。じゃあ、三人分の力キ氷買ってきて来て」

そう言ったもとて美羽は袂からお金を皆穫に渡した。

「えっ、いいんですか」

「うん、だいいち大輝さんのオゴリだから」

「というか最初から決まってたんですね。私達が休憩に入ってるって事を。」

「それじゃあ、行って来るね」

「行って来ます」

「おう、じゃあ、よろしく」

美羽さん、さすがに手じゃなくて足を振って見送るのは行儀が悪いですよ。

そんな感じで三人は前夜祭を迎えようとしていた。

## 前夜祭 前（後書き）

……………後書きに書くことが何もない！

はい、その人、なら後書き書く必要ないじゃんとか思わないように。というか、後書きは作家にとつてとても大事な場所なんだよ。何故かと言うと、何を書いても自由だから。

はいはい、その人、引かないように。というかね、作中ではどうしてもその作品の雰囲気壊すことはかけないわけですよ。まあ、当然なんだけど。

だが、後書きは何を書いても自由、つまり、完全に無法地帯のフリーダム、幻想卿にも劣らない夢の世界。

……………あの、もしかして私、壊れかけてます。うゝん、なんか最近変だとは思ってたけど、とうとう末期に入ったかな、こりや。

はいはい、じゃあワケの分からない後書きはここまでにして、いつもの行きますね。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしく願います。

以上、何が末期なんだろうと思った葵夢幻でした。

## 前夜祭 後

前夜祭での全ての行事が終わり、美羽と優衣の二人はいつもと同じように皆穫の部屋へと転がり込んだ。

もちろん、夕食をたかるためである。

さすがの二人も気疲れしたのか、床に突っ伏すように寝転んでいた。

「あのー、お二人とも、手伝う気は無いんですか」

「ない」

「同じく」

「即答ですか！ と言いますか、ここ数日ずっと、私がお二人の夕食を作ってるんですけど」

『ありがとー、皆穫』

いや、お礼を聞きたいわけじゃないんですけど。それに、そんな声をそろえて言わなくても。

「まあ、祭りが終わるまでだから、それまで我慢してちょうだい」

「はい、わかりました。それよりも優衣さん大丈夫ですか」

「皆穫にはこれが大丈夫なように見える？」

「はい、割と平気かと」

「そんなわけあるか！」

「優衣、そんなに勢いよく立ち上がって喋ると、倒れるわよ」

「……美羽さん、もう優衣さん倒れましたけど」

「ほっとけば」

「分かりました」

「うー、少しは心配してよー」

「あんたを心配できるほどの力は、私には残ってないわよ」

「みなえー」

「優衣さんなら、頑丈に出来てますから大丈夫ですよ」

「……皆穫、最近私に冷たくない？」

「というか、皆穫があんたの扱い方を覚えてただけよ」

「うう、人を機械扱いしないでよね」

「じゃあどう扱えばいいんですか、優衣さん。」

「けど優衣、意外と早く開放されたわね。私はてっきりまだ神楽の稽古をしているものだと思ってたわ」

「去年もやったから体が覚えてたんだと思うよ。それに、美羽が今日中に完璧に神楽を舞えないと帰してもらえないって言うから、必死になってがんばったんだよ」

「おー、おー、そいつは殊勝なことだ」

美羽さん、たぶんその意味は違いますよ。

「けどまあ、皆穫も私達の夕食を作ってくれば巻き込まれないわよ」

「いきなり、何を言い出すんですか美羽さん」

「んっ、今日は前夜祭でしょ。だから集会所では今頃宴会が開かれてるのよ」

「はあ、そうなんですか」

「というか、それが私と何の関係が。」

「本当なら私達巫女も接待をしないといけないんだけど、皆穫は疲れきった私達の面倒を見るっていう口実がないと、今頃集会所でおじさん達の接待をしないといけないわけよ」

「確かに、それは大変そうですね」

「でしょ、だから早くご飯作って」

結局それが言いたかったんですね。

「でも、私達が接待してないって事は、誰が接待してるんですか」

「んっ、とりあえず大輝さんと近所のおばちゃん達、それにバイトの人も手伝ってくれてるんですよ。確かそうだよな、優衣」

「うん、とりあえず未成年のバイトの人以外で、接待が出来る人にも手伝ってもらってる」

「けど、本来なら皆穫がそのバイトの人達に指示を出さないといけないんだよ。それが新人の皆穫には大変だろうからっていうことで私達のお世話をする事になってるの」



いつそんなことが決まったんですか。といいますか…。

「それじゃあ、集会所に行って手伝ってきますね」

「すみませんでした。お願いだからご飯作って」

ふっ、勝った。

結局、いつも通りに優衣達の分まで夕食を用意した皆穫は、テーブルを三人で囲む。

「それじゃあ、いただきます」

「いただきます」

なんといいですか、お二人とも疲れている割にはよく食べますね。勢いよく食事を進めていく二人を見て、さすがに皆穫も不思議そうな顔をする。

というか、そんな元気があるなら自分で夕食を作ってください。

それほど、優衣と美羽は元気よく夕食を食らっていくのだった。

「ふう、ごちそうさま」

「ごちそうさま。皆穫、ありがとね」

「いえいえ、お粗末さまでした」

食器を片付ける皆穫、そして再び寝転ぶ優衣と美羽。

お二人とも手伝う気が無いんですね。というか、さっきの元気はどこにいったんですか、それとも食事の時限定なんですか。

「そういえば、明日が本祭なんだよね」

「そうね、特にあなたの神楽が一番のメインなんだから、しっかりとやんなさいよ」

「うっ、それにしてもなんで私ばかり神楽を舞うことが多いんだろ。大輝さんも私にやってもらいたいみたいだし」

「あんだ、その理由分かってないの？」

「えっ、美羽は知ってるの？」

「というかね、私がこの理由を知った時はかなりむかついたわ」

「美羽さんがそんな事を言うのも珍しいですね」

「一応私にもプライドって物があるのよ」

「へえ、私が神楽を舞うことが多いのは美羽のプライドを傷つけてるのと一緒になんだ」

「凄くむかつく言い方するな」

「まあまあ、それで、その理由ってなんなんですか」

「ああ、それ。そうね、明日美羽の神楽の時に説明するから、というか見たほうが早いわね」

「というか、明日は忙しいんじゃない」

「神楽が始まるときには人が舞台に集中するからね、私達はその間だけは少しだけ時間が取れるのよ。まあ、バイトの子達に任せるだけなんだけどね」

「というか、それってサボってるだけなんじゃ。」

「じゃあ、明日は神楽が始まるときに迎えに行くから、優衣の神楽がよく見える場所に案内するわよ」

「はい、それは楽しみです」

「う、私はそういう話をされると緊張してくるよ」

「あんた去年もやったんだから、少しは慣れてるでしょ」

「それでも、あんな人前で踊るのは緊張するよ。それに失敗なんて許されないんだから」

「まあ、一応祭事だからね。失敗なんてしたら凄く怒られるわよ」

「う、不安をあおらないですよ」

「というか、今の美羽さん凄く黒いんですけど。」

「あつ、そういえば皆獲」

「なんですか、優衣さん」

「お風呂まだ？」

「今日はお風呂まで入る気ですか！」

「私は最後でも構わないけど、優衣は疲れてるから先に入れてあげて」

というか美羽さんまで入る気ですか。

「はあ、早くゆつくりとお湯に浸かりたい」

「あんたね、お風呂で寝るんじゃないわよ」

「うん、がんばるよ」

えっと、それはお風呂で寝る可能性があるってことですか。

『じゃあ、皆穫よろしく』

はいはい、もう分かりましたよ。

こうして皆穫は一度風呂を掃除してから、お湯を溜めていった。

そしてのんきにお湯に浸かっている優衣の声が聞こえると、皆穫は一気に疲れた気がする。

そんなかなやりながら、明日の本祭に向けて英気を養う優衣と美羽、それに反して皆穫はなんだか疲れた気がしたのは気のせいなのだろうか。

## 前夜祭 後（後書き）

えゝ、かなり間が開いてしまったみこみこですが、なんとか書き終わりました。

というか連載を二本やつてる時点で自分の首を絞めてるよ絶対。うん。

まあ、そんな訳で次はいよいよお祭り当日になるわけですが、まあ、いつもどおりほのぼのとした雰囲気になっちゃったスパイスを加えてみようと思ってます。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そしてこれからもよろしく願います。更に評価感想もお待ちしております。おります。

以上、珍しくまともな後書きを書いたなと思った葵夢幻でした。

## 本祭

「皆穫、皆穫」

本祭の最中で忙しさが絶好調の中で皆穫は後ろから声を掛けられるが、社務所の対応をバイトの子の任せると振り向くがそこには誰もおらずに扉が少し開いていて、その向こうから手だけ出して手招きしている人影が見えた。

とりあえずそこに行く皆穫。すると突然引つ張られると口を塞がれる。

驚きのあまり抵抗する皆穫だが、そんな皆穫に引つ張り込んだ自分が耳打ちする。

「皆穫、そんなに騒がないで、これからサボるのにバレるでしょ」  
そういつて皆穫を介抱したのは美羽だった。

「美羽さん？　　というか何するんですか」

「とりあえず昨日言ったでしょ。これから優衣の神楽が始まるから迎えに来たのよ」

「……それだけのためにこんな手の込んだ事を」

「そうでもないと言われないでしょ」

……サボる事が前提なんですネ。

「そんな訳で行くわよ」

「えっ、どこにですか？」

「だから、優衣の神楽がよく見える場所よ」

そのまま勝手に行ってしまう美羽を皆穫は慌てて追いかけた。

……えっと、ここは本当に私の知っている神社なんでしょうか。  
皆穫がそう思うほどの獣道を美羽の先導で進んでいる。

「美羽さーん、まだなんですか」

「んっ、もうちょっとよ」

はあ、いったいどこまでいけばいいのか。

皆穫がそんな事を思っていると美羽がその先を指差す。

「ほら、見えてきた」

皆穫達がそこに到達すると、そこは森から開けているが眼前には絶壁があつて落ちたら間違いなく死ぬだろう。

「こんな場所につれて来てどうするつもりなんですか？」

「だから昨日言つたでしょ。優衣の神楽がよく見える場所に連れて行つてあげるつて」

「ここがそうなんですか？」

「そうよ。とにかく崖つぶちに立つて下を見てみなさい」

「……美羽さん、いきなり後ろから押すのはなしですよ」

「……いやね、そんなことするわけじゃない」

なんか一瞬の間があつたような気がするんですけど。

「チツ」

なんですか、そのチツつてなんなんですか！

「とりあえず見て見なさい」

「はいはい」

しかたなく皆穫は言われたとおりに崖つぶち近くに立ち下を見下ろす。

そこには四方に榊とかがり火がもつけてあり、中央には舞殿が設置されており本殿から長い廊下で繋がっている。

そして舞殿の周りにはロープで遮られているが沢山の人々が集まっていた。

「はあ、なんか凄いですね」

「来年はあんたがあそこで神楽を踊るのよ」

「……来年は雨にならないですかね」

「残念ね、雨が降りそうなきには簡単な屋根が作られるのよ。だから雨天決行」

なんか、今から気が引けるんですけど。

皆穫が来年の事なのに緊張していると下の方が突然騒がしくなっ

てきた。

「おつ、そろそろ始まるみたいね」

皆穫は改めて下を見下ろすと本殿からゆっくりと歩いてくる優衣と、その後ろに演奏用の雅楽を持った人が列を成してゆっくりと舞殿に向かつて歩いてる。

「はあ、優衣さん雰囲気違いますね」

皆穫の言ったとおり今の優衣はいつもの感じがまったく無く、その歩き方から仕草の一つまで優雅に見える。

「まあ、優衣も毎日稽古させられてたからね。あれぐらいはやってもらわないと」

……そんなに厳しいんですか、稽古つて。

そして演奏者と優衣が定位置に付くと演奏が始まり優衣はゆっくりと神楽を舞い始める。

「はあ」

もう皆穫には言葉は出なかった。それほど優衣の神楽は優雅で、優衣がまるで天女のようにも見えたからだ。

「優衣さん、なんだかすごく綺麗ですね」

「そうね……」

何故か不機嫌な返事を返す美羽。

「美羽さん……」

恐る恐る声をかける皆穫だが、美羽は大きく溜息を付いた。

「あの子は容姿だけはいいいから。こういうことをやらせると凄く人気が出るのよ」

「まあ、確かに今の優衣さんは綺麗というか優雅というか……」

「いつもの優衣とは想像出来ないでしょ」

「確かに……」

「だから余計に頭にくるのよね」

……美羽さん、もしかしてそれは嫉妬ですか。

「まっ、それは置いといて、来年は皆穫が踊るんだからよく見ておきなさいよ」

「うつ、今の優衣さんの姿を見ると自信が無くなるんですけど」  
「まあ確かにね。でもやらないといけない物はやらないとね」  
「というか、来年は私に決まってるから気楽ですね美羽さん。」

「だからしつかりと見ておきなさいよ」

「はい」

そして改めて優衣の神楽に目を向ける皆穫。

だが皆穫には優衣の神楽よりも優衣自身がまるで別人のように綺麗で、優雅に踊っている姿が本当の天女のように思えて、ただただ見入るだけだった。

そうしているうちに優衣の神楽も終わり、祭りも終わりを迎えるのだった。

「皆穫、ご飯」

えっと、さっきの私の感動はどうすればいいのでしょうか。

祭りが終わりすっかり疲れきった三人だが、いつものように疲労度が一番低い皆穫の部屋に集まっていた。

「優衣さん本当に神楽を踊ってる時とは別人ですね」

「う、何だよその言い草は、私だってやる時はやるんだから」

「その代わりやらない時にはやらないのよね」

「いいじゃん、ちょっとぐらいは大目にみてよ」

「いつもかなり大目に見てるわよ！」

「美羽、そこはもう少しまけるところじゃ」

「これ以上まけたらあんたの価値はタダになるじゃない」

「皆穫、美羽がいじめる」

いや、私に言われても困るんですけど。

それにしても……。

皆穫は先程とはまったく別人のようにだらけている優衣をもう一度見詰める。

さっきの私の感動はいつたいたんだっただんでしょか？



永遠の疑問を感じながら三人はいつもの時間を過ごしていくのだ  
った。

## 本祭（後書き）

そんな訳で最終回です。

というか、いい加減に連載を二本持つ事は今の俺には出来ない。というかノリで始めてしまったみこみこだからすぐにネタに詰まっていた。

そしてそれ以上にエレメが盛り上がってる。したがってみこみこは今回で最終回になりました。というかいい加減にネタが無いので、まあ、次に巫女物をやる時にはちゃんと設定してから書きますので、そこら辺は安心してください。特に巫女萌えの人（私も含めて）。

それと私の作品、特にエレメを読んでくれる方にはお分かりでしょうが、現在修正作業の真っ只中です。ですが、最近ブログを始めました。そんな訳でブログにもエレメの事を触れておりますので、続きが気になる方はブログも読んでみてはいかがでしょうか。

私のホームページである冬馬大社からいけますのでグーグルで検索してみてください。

ではでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。そして今までお付き合いいただいてありがとうございます。更に評価感想もお待ちしております。

以上、ノリで連載を始めるもんじゃないと思った葵夢幻でした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7117c/>

---

みこみこ ～ 岩城神社日誌 ～

2010年10月8日15時44分発行